

学位被授与者氏名	廣木 和子
論文題目	C.S.Lewis のキリスト教思想 —アレゴリカルな表現形式をめぐって—
論文審査結果の要旨	<p>廣木氏は、ルイスのアレゴリーの本質を縮約による大いなるもののモデル化にあると見、ルイスの作品は縮約的アレゴリー形式で書かれていると考察している。従来の研究においても、C. S.ルイスの作品がアレゴリカルであるということは繰り返し指摘されていることであるが、本論文は、この形式が単にルイスの文体的特徴というだけでなく、彼のキリスト教的思想に結びついていて、C. S.ルイスのすべての著作に一貫して見られるもっとも基本的な世界観であることを指摘する。廣木氏は、まずルイスに与えたイギリス 19 世紀ロマン主義の影響を論じる。ルイス自身はロマン主義を強く批判しており、従来の研究もルイスを反ロマン主義と位置づけている。一方、本論文はルイスの自叙伝である『喜びの訪れ』(<i>Surprised by Joy</i>)に注目し、ルイスの思想遍歴を分析することにより、その世界観がロマン主義的自然観を経由し、それを吸収しつつ古典主義的、キリスト教的世界観に昇華する形で到達されたものであると考察する。これは従来の研究にはなかった説得力のある見解で、高く評価できる。ルイスはその著『奇跡論』(<i>Miracles</i>)の中で、キリストの奇跡を「大いなる奇跡」の縮約によるモデル化であると言うが、廣木はこれは、ロマン派の自然観から吸収されたものであると言う。ルイスは、ロマン主義の中核的主張である目の革命、すなわち「大いなる奇跡」としての自然への「気づき」をキリスト教の奇跡の概念と結びつけたと分析している。本論文はルイスのアレゴリカルな世界観はファンタジー作品だけで用いられているだけでなく、ルイスの専門分野であるイギリス中世・ルネサンス文学についての学術的な論考や『奇跡論』のような哲学論考、さらには『キリスト教の精髓』(<i>Mere Christianity</i>)のようなキリスト教の啓蒙書に至るまですべての著作に一貫して見られるものであるとしている。一般にルイスのアレゴリー形式は評価が低く、ルイスのもっとも親しいオックスフォード大学の同僚でもあり、同じくキリスト教的ファンタジー作家でもあった J. R. R. トールキンでさえも否定的な見解を示していた。この形式は、ルイス文学の評価を下げる最大の要因でもあったのであるが、本論文はこれをむしろ肯定的に捉え、これをルイス特有の優れた世界観として、文学面だけでなく、思想面、宗教面も含めて全体的に再評価したものである。残念ながら、説明不足な論述や不正確な点も散見されるが、全体として独創性に富み、非常に深い内容となっている。</p> <p>2022 年 2 月 18 日に、北九州市立大学北方キャンパス 3 号館 321 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(英米言語文化)として十分な内容であると判定した。</p>